

竹内部会長講演

前原子力委員会委員で元日本原燃社長で再処理リサイクル部会長の竹内様です。竹内様は、東京電力で火力発電関係を長年かかわってきました。この時期は、日本が敗戦から高度成長を続けている時期で、資源のない怖さと高度成長での石油および電気がサポートした時代を共有した人です。実体験からどうしたらいいかを常に考えてきた人です。実体験と、常に考えてきた分だけ、幅広く、深く考えることができる人です。

今回もんじゅの地元敦賀にまいりましたのも、もんじゅが日本にとって、あるいは世界にとって財産である。と考えているわけですが、それがどうしてなのかもこの講演で明らかになるものと思います。

竹内哲夫(前原子力委員・(社)日本原子力学会再処理・リサイクル部会長)

- ・ 原子力技術者として東海発電所の原子炉の設計を行った後、東京電力にて火力発電所の現場経験を積み、再び原子力に戻る。キセル原子力屋と自ら称している。(スライド竹内1)
- ・ 恐竜時代に何億年もかけてつくられた地球の蓄財(石油)を東電の火力発電所で世界一焚いた。今振り返ると懺悔もの。そんな体験から、我が国の将来のエネルギーを確保するために、核燃料サイクルと高速増殖炉をしっかりと推進しなければならないと説く。(スライド竹内2)
- ・ 日本の高度成長は2つの津波、すなわち石油とコンピューターで始まった。大量生産から油漬け社会の反省が生まれ、燃料の多様化が進められ、エネルギー消費の効率化も進んだ。そんな中での京都議定書の発効。(スライド竹内3)しかし、ほんとにできるのだろうか。産業は徹底的に省エネをしている。一方、便利な生活で家庭用電力は伸び続けている。(スライド竹内4) 1/5 もこれからカットしなくてはならないことは至難。新エネで石油の代役は、数%どまりである。(スライド竹内5) 電力供給を何でしのぐか、主役は原子力しかない。ウランは石油の6万倍の密度がある。(スライド竹内6) 私の希望では2025年には「もんじゅ」に継ぐ高速炉のプラントを希望する。理由は今の技術を継承できる人間の命があるうちにプラントの建設を実現すべき。2100年には電力7割を原子力、それも高速炉で賄うことを提案する。理由は軽水炉では使えるウランやプルトニウムは廃棄物になってしまうが、高速炉では資源として使える。「もんじゅ」を再起動させ、第4世代原子炉実証や、プルトニウムの仲間のMAの炉内変換のつめを行う。(スライド竹内7) 地元として元気を取り戻してやっていきたい。原子力はこれからも伸びる産業である。放射線利用も地元で元気を与える。(スライド竹内8) 米国でも石油ピークはエネルギー危機と認識されている。我が国でもその意識が必要である。